

実践活動報告書：地域教室における日本語教師と日本語交流員の効果的な協働の在り方

長野県地域日本語教育コーディネーター 東信地域担当 岩崎容子

## 1. 課題設定の背景

長野県で現在取り組んでいる地域日本語教室創出支援事業では「多様な日本語教育人材が連携した学習機会」と「日本語学習者が地域と繋がる機会」が提供できる日本語教室の創出を目的とし、モデル地域日本語教室（以下モデル教室と呼ぶ）を実施している。このモデル教室では専門家である日本語教師と県の研修を受けた地域住民である日本語交流員が連携して支援に携わるという形を一つの在り方として提案し、実施している。しかしながら、これまでボランティア主体で行われてきた地域教室とは異なる形式であるため、日本語教師と日本語交流員がどのように協働していくのがよいか現在試行錯誤の段階である。

今回、担当地域で実施していた2年間のモデル教室実施期間が終了するにあたり、改めて効果的な協働について考えるべく研修課題として設定した。

## 2. 実践の内容

リラックスした雰囲気の中で活動のふりかえりや意見交換をし、モデル教室での協働についてのアンケート調査を実施。グループインタビュー形式とすることで、日本語教師、日本語交流員それぞれの立場で感じていることを直接聞き取る。聞き取った内容をまとめ、今後の教室運営の手がかりとする。

## 3. 実践の流れ

- ①日本語教師と日本語交流員の協働に関するアンケートを作成
- ②支援者交流会内でインタビュー形式によるアンケート調査を行う
- ③アンケート結果とインタビュー内容をまとめ、年度末のふりかえりの際に全員と共有
- ④県が行う年度末アンケートと合わせて、2者の効果的な協働について考察する
- ⑤考察した内容を、モデル教室後の自走教室立ち上げや、今後のモデル教室事業の参考とする

・アンケート調査について：

- 1) アンケート名：日本語教師と日本語交流員の協働に関するアンケート
- 2) 対象者：令和4年度佐久市日本語教室の日本語教師及び日本語交流員
- 3) アンケート実施日：2022年11月12日（土）（当日欠席者には別途アンケートを依頼）  
\*出席者（教師2名、交流員13名中）：教師1名、交流員8名
- 4) 回答数：12（15名中）
- 5) 集計結果の報告会：2022年12月10日（土）\*出席者：教師0名、交流員9名
- 6) 考察：年度末に県が行ったアンケート結果と照らし合わせて行う

#### 4. インタビューとアンケート結果からの気づき

インタビューやアンケートから以下のような現状が見えてきた。

- ・日本語教師と日本語交流員がいる教室の形については、多くの人が好意的に捉えている。
- ・支援者側は、日本語学習効果よりも地域を知ることにより有効性を感じている。
- ・多くの人が、教室内に違う立場を持った存在がいることで、心強いと感じている。
- ・その一方で、教師側はコーディネーターや交流員がいることで、授業にやりにくさを感じている。
- ・事前の打ち合わせや支援者間の交流が足りない、なかなかできないと感じている。
- ・メンバーの中にはもっと自主的に教室運営に関わりたいと考えている人もいる。
- ・参加する学習者の定着を課題と考え、ニーズに合った教室作りの必要性を感じている。
- ・参加した学習者は以前より地域での生活がしやすくなったと感じている。

#### 5. 実践を通して「行ったこと」「考えたこと」

「行ったこと」：モデル教室に関わる教師、交流員との対話

- ・アンケートをグループインタビューの形式にすることにより、コーディネーターはもとより支援者同士が対話し、教室について考える時間を持つことができた。

「考えたこと」：地域教室での支援に対する個々の意識について

話を伺う中で、日本語教師と日本語交流員の教室参加に対する意識の違いが見えてきた。交流員側は「楽な気持ちで参加できる」と感じている一方で、教師側はコーディネーターや交流員と連携をとっていくことに難しさを感じており、この点については今後しっかりと検討していく必要性を感じた。

#### 6. 課題解決に向けた実践を通じて、地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割

一人一人の話に耳を傾けることで、それぞれが持つ考えや思いに焦点を当てる機会を作ることができた。誰かが聞いてくれる、誰かに伝えられる、困ったときに頼る先があるということは支援者にとって必要な、ある種の休息の場であると感じた。自分自身はまだその役割を果たせたとはいえないが、今回の学びを今後活かしていきたい。

#### 7. 地域日本語教育コーディネーターとして自身が大切にしたい視点

地域日本語教育においては、関わる人それぞれが多様な考えや思いを持っているということや、地域教室は学習者にとってだけでなく、支援側にとっても居場所であるということや、常に念頭に置きながら、対話を重ねていくことを大切にしていきたい。

#### 8. 実践において、難しいと感じたこと、今後に向け知りたいこと

今回の実践においては、コロナ禍の影響もあり、そもそも支援者同士が対面で集まり、顔を合わせて話すこと自体に難しさを感じた。特に交流員からは、2年間継続して参加してい

る方が多かったにも関わらず、お互いのことについてほとんど知らない、知る機会がなかった、という意見も多く挙げられた。以前であれば、教室後食事に行ったり、誘い合っってイベントに参加したりといった交流を通して、学習者とのつながりはもちろん、支援者同士の結びつきも生まれていたであろうが、そういった機会がないままに共に支援をするということがいかに難しいことであるか、ということに気付かされた。

コロナ禍で同じような状況の教室が多くあるのではと感じ、顔を合わせなくてもコミュニケーションが取り合える仕組みがこれからの教室運営には必要になってくるように思う。

今回教室に参加した交流員の多くは教室のある地域に住んでいる地域住民であったため、実施した教室のコンセプトや活動内容との親和性が高く、教師と交流員のいる教室についても想像していたよりも好意的に受け止めていることがわかった。その一方で教師側にとっては地域日本語教育自体が馴染みのない分野であったことに加え、コーディネーターや交流員とどのように関わっていくべきかを難しく感じていたことがわかった。交流員との連携についてもモデル教室の形であるからやむを得ないといった思いが少なからずあったように感じた。

また、今回のモデル教室に関しては市側が提供したい内容を盛り込んだシラバスとなっていたため、学習者のニーズにあった効果的な学習という部分に持っていくことが難しい面があったことも、教師側が感じる「やりにくさ」につながっていたように思う。

今回の実践を通し、日本語教師と日本語交流員の効果的な協働を目指す上で必要なものが少しずつ見えてきたように感じている。また、学習面や地域参加に効果的なだけでなく、参加者の相互理解や、居場所としての教室作りなど多方面に「効果的な協働」となるにはどうしたらよいか、今後も引き続き考えていきたい。